

新潟歯学会学会抄録

平成15年度 新潟歯学会総会

[一般講演]

日時 平成15年4月19日(土) 午前9時30分～

場所 新潟大学歯学部講堂(2F)

[特別講演]

サイエンスとしての口臭 - 臨床への展開

九州大学歯学部附属病院

於保 孝彦

近年の清潔志向の高まりから、あるいは社会における様々な人間関係の軋轢から口臭に悩む患者さんは増加傾向にある。平成11年の厚生省「保健福祉動向調査」では、国民の14.5%が口臭に悩んでいることを示している。このような状況に対処するため歯科大学附属病院を主体として口臭治療外来の開設が相次ぎ、専門的な対処がなされるようになった。九州大学歯学部附属病院においても平成10年に同外来を開設して以来400名以上の新患が受診している。同外来では官能試験や口臭の主な原因物質といわれている揮発性硫化物(VSC)レベルの検査を行った後、診断、治療を行ってきた。これまでに他覚的口臭レベルが低い人ほど精神的自覚症状が強いこと、官能試験に代わる検査法としてはガスクロマトグラフが優れていることなどを認めた。また、VSC以外の臭気物質としてはアンモニアのレベルが口腔清掃状態と関連のあることなどを認めた。

口臭の予防法としては口腔清掃の励行や洗口剤の使用などが一般的である。我々は歯周病細菌のメチルメルカプタン(CH₃SH)産生酵素(L-methionine- γ -deaminomercaptomethane-lyase)をコードする遺伝子のクローニングを行った後、同酵素の欠損株を作製した。この欠損株からはCH₃SHの産生を認めず、またマウスを用いた実験では野生株に比較して毒性の低下が認められた。さらにメチオニンのフッ化物誘導体であるトリフルオロメチオニンをを用いることでCH₃SH産生菌の増殖が阻害されたことから、同剤の口臭予防薬としての応用の可能性が示唆された。

また、もう一つのVSCである硫化水素を産生する酵素(L-cysteine-desulphydrase)についても、歯周病細菌や口腔レンサ球菌からその遺伝子をクローニングし酵素学的特徴などを検索した。これら口腔細菌の口臭産生機序に着目した予防法の開発が、口臭患者の臨床のために是非必要と考えられる。

1. 特殊神経終末における11 β -hydroxysteroid dehydrogenase II と mineralocorticoid receptor の免疫組織化学的局在について

新潟大学大学院医歯学総合研究科

¹口腔健康科学講座小児口腔科学分野,²摂食環境制御学講座顎顔面解剖学分野木下承子¹, 野田 忠¹, 河野芳朗²,竹内亀一², 前田健康²

ステロイドは神経組織でも合成され、これらは神経ステロイドと呼ばれている。シュワン細胞もこれらステロイドを合成し、末梢神経の発生・再生に関与していることが知られている。11 β -hydroxysteroid dehydrogenase (11 HSD) はグルココルチコイドとミネラルコルチコイド受容体(mineral corticoid receptor; MCR)の結合を抑制し、アルドステロンとMCRとの結合特異性を向上させると考えられている。さらに、これらのタンパクはナトリウムポンプやナトリウムチャネルを活性化することが示されている。今回、我々はこれら二種のタンパクが機械受容器に強く発現することを見いだしたので報告する。

材料として、12週齢のウィスター系ラットの切歯歯根膜と口蓋粘膜を用いた。アルデヒド系固定液で灌流固定、EDTA脱灰後、通法に従い、厚さ5 μ mのパラフィン切片を作成した。一次抗体として11 HSD 抗体およびMCR抗体を用い、ABC法にて反応部位を可視化した。さらに、MCRはステロイドホルモンの非存在下で、分子量90kDaの熱ショックタンパク(Hsp90)と複合体を形成することが知られているので、あわせてHsp90の局在も検討した。なお、神経線維およびシュワン細胞の同定にはそれぞれprotein gene product 9.5 (PGP9.5)抗体ならびにS-100タンパク抗体を用いた。

切歯歯根膜ならびに口蓋粘膜の上皮下には細い神経線維に加え、太い神経線維からなる機械受容器が観察され、これら特殊神経終末にはS-100タンパク抗体で強く染まる円形のシュワン細胞すなわち終末シュワン細胞が付随していた。一方、11 HSD 抗体およびMCR抗体を用いた免疫染色ではS-100タンパクの免疫染色同様、円形の細胞が染め出された。これら免疫陽性の円形細胞はその存在部位ならびに形態から、終末シュワン細胞と同定された。この免疫反応は細胞質に局限し、核は免疫反応陰性であった。また、この終末シュワン細胞はHsp90の免疫活性を有していた。以上のことから、終末シュワン

細胞はステロイドホルモンの標的細胞であり、これら3種のタンパクが終末シュワン細胞の有効なマーカー物質であることが示された。また、終末シュワン細胞で活発なNa⁺/K⁺のイオン交換が行われていること、さらに終末シュワン細胞が特殊神経終末の発生・再生過程に関与していることが想像された。

2. 新潟大学小児歯科診療室で処置した萌出障害について

新潟大学大学院医歯学総合研究科
口腔健康科学講座小児口腔科学

田口 洋, 小林博昭, 富沢美恵子, 野田 忠

【目的】

小児歯科医療は、乳歯の萌出から乳歯咬合の完成、さらに永久歯への交換から永久歯咬合の成立までを正常に経過させることを目的のひとつとしている。この咬合の誘導において、歯の萌出障害への処置は、咬合を乱す異常の処置として重要な部分を占めている。今回演者らは、小児歯科診療室が開設された1979年9月から2002年12月までの23年間に、当診療室で処置した萌出障害について、その実態を調査したので報告した。

【方法】

2002年12月までの23年間に、当診療室で萌出障害への処置を行った延べ701名（男児363名、女児338名）、760歯（永久歯735歯、乳歯25歯）を対象とした。萌出障害が認められるが経過観察しているもの、あるいは口腔外科や矯正歯科に処置を依頼したものは対象から除外した。

【結果および考察】

萌出障害を定期診査で発見したものが約40%を占めていた。頻度が多かった歯種は、上顎中切歯（38%）、上顎犬歯（15%）、上顎第1大臼歯（9%）の順であった。処置は1歳から23歳にまでおよび、先行乳歯の抜去、歯牙腫などの原因除去、開窓、牽引、誘導、摘出など多岐にわたっていた。原因除去、開窓などの外科処置、牽引や誘導など装置を使った処置を、齲蝕の定期診査・治療とともに継続してできるのが小児歯科の特徴である。また、齲蝕治療などで低年齢から来院している小児の萌出障害を定期診査で発見することにより、早期に治療を開始することのできる小児歯科の特性が認識された。

3. *Porphyromonas gingivalis* 抗原刺激に対するT細胞のIL-17, RANKL発現

新潟大学大学院医歯学総合研究科
摂食環境制御学講座歯周診断・再建学分野
小田太郎 山崎和久 吉江弘正

【目的】

T細胞は免疫応答の制御において中心的な役割を担う細胞である。これまでに歯周炎病変部のT細胞が細胞性・体液性免疫応答に関与している事が示されてきたが、歯周組織破壊におけるT細胞の直接的な関与については未だ明らかにされていない。近年、T細胞が関与する組織破壊機構が明らかにされつつあり、その中でIL-17と Receptor activator of NF- κ B ligand (RANKL) が注目されている。そこで我々はIL-17とRANKLの歯周組織における発現と、歯周病原細菌刺激に対する発現動態について検討した。

【方法】

インフォームドコンセントにより同意の得られた成人性歯周炎患者19名（歯周炎群）と臨床的健常者12名（歯肉炎群）を被検者とした。病変部よりポケット上皮を含む歯周組織を採取し、また同患者の末梢血より単核細胞（PBMC）を分離した。それぞれの全RNAを抽出し、IL-17, RANKL 特異的プライマーを用いてRT-PCRを行った。2%アガロースゲル電気泳動、Ethidium-Bromide染色後UV下で検出した。また、同様に成人性歯周炎患者19名と臨床的健常者12名のPBMCを24穴プレートに2 × 10⁶個/ml/wellの濃度で播種し、*Porphyromonas gingivalis* outer membrane protein (*P.g* OMP) (2.0 μg/ml) で刺激し、6日間培養後、全RNAを抽出した。以下同様にRT-PCRを行い、UV下で検出した。培養上清を回収し、IL-17産生量をELISA法にて測定した。さらに、歯周炎患者5名に関して、*P.g* OMP刺激後のT細胞におけるRANKLの発現をflow cytometryにて検討した。

【結果】

P.g OMP刺激により、IL-17 の発現はmRNAレベル、蛋白レベルで増加した。一方、*P.g* OMP刺激によるRANKLの発現はほとんど認められなかった。歯周組織中において、IL-17 mRNAの検出頻度は歯肉炎群の方が歯周炎群よりも多かった。また、RANKL mRNAは発現強度、検出頻度ともにIL-17よりも低かった。

【考察】

本研究により、IL-17が歯周炎の病態形成に関与している可能性が示唆された。また、歯肉炎中のIL-17の発現に関して抑制的に働く調節因子が存在する可能性が示唆された。

4. 多血小板血漿と多孔性ハイドロキシアパタイト混合移植材の歯周骨内欠損に及ぼす臨床効果：6か月予後

新潟大学大学院医歯学総合研究科
 摂食環境制御学講座歯周診断・再建学分野
 奥田一博, 田井秀明, 中曾根直弘, 佐藤 匡,
 齋藤宜則, 鈴木啓展, 吉江弘正

【目的】

我々はこれまでにin vitroの系で、血漿中の血小板を多く含んだ分画、多血小板血漿 (Platelet-Rich Plasma; PRP) には 1) PDGF, TGF- β が高濃度に濃縮されていること, 2) 骨芽細胞および歯根膜線維芽細胞に対して増殖を促進し上皮細胞には抑制を示す作用があること, 3) 歯根膜線維芽細胞においてフィブリン塊の形成を介してコラーゲン産生を促進することを明らかにした (Okuda et al., J Periodontology, in press., Kawase et al., J Periodontology, in press.)。これよりPRPは増殖因子とフィブリンの相乗効果により歯周組織再生を促進する可能性があることが示唆された。そこで今回は、多孔性ハイドロキシアパタイト (HA) を担体としたPRP+HA混合移植材を歯周骨内欠損に応用し、PRPの臨床効果を明らかにすることを目的とした。

【対象および方法】

歯周基本治療完了した23名 (男性6名, 女性17名, 平均年齢57歳) の慢性歯周炎患者よりステントを用いて6mm以上のポケット (PPD) と6mm以上の付着レベル (CAL), 規格レントゲン写真より3mm以上の骨内欠損を示す23部位を対象とした。歯肉溝切開による全層弁を形成・剥離後、徹底して病巣を搔爬して骨欠損を明示した。止血を確認後、アルギン酸ナトリウムにより活性化させたPRPとHA混合移植材を填入し緊密に縫合した。術後3か月までは2週ごとに専門的清掃を行い、6か月後に評価して、ベースラインの値と比較検討した。

【結果と考察】

骨内欠損の分布は1壁性：4部位, 2壁性：4部位, 3壁性：15部位であった。6か月後の評価ではベースラインと比較してPPD：7.17 \pm 1.80mm 3.22 \pm 1.09mm (P<0.001) で 4.09 \pm 1.44mmの減少, CAL：7.52 \pm 1.86mm 5.09 \pm 1.62mm (P<0.001) で 2.26 \pm 1.01mmの獲得, レントゲン写真による骨欠損深さは3.83 \pm 2.15mm 1.57 \pm 1.70mm (P<0.001) で 2.44 \pm 1.53mmの減少であった。

以上より、PRPと多孔性ハイドロキシアパタイト混合移植材は、歯周骨内欠損に臨床的に有効であることが明らかとなった。

5. 唾液腺多形性腺腫細胞系の樹立：腺腫内癌腫発生機序の試験管内証明

新潟大学大学院医歯学総合研究科
¹顎顔面再建学講座口腔病理学分野, ²組織再建口腔外科学分野
 丸山 智¹, 程 瑠¹, 新垣 晋², 朔 敬¹

【目的】

われわれは唾液腺多形性腺腫組織内に巣状癌や異型細胞が出現する現象が腺腫内癌腫発生の背景となる可能性を示唆してきた。今回は多形性腺腫組織より腫瘍細胞を単離・クローン化して性格付けをおこなった。

【方法】

61歳女性の口蓋に発生した多形性腺腫の手術材料組織を細切し、コラゲナーゼ処理により腫瘍細胞を単離して初代培養をおこない、多数回継代後にクローン化した。これら細胞について、染色体解析するとともに蛍光抗体法, PCR法, シークエンス法によって、各腫瘍細胞マーカーの発現とp53遺伝子変異を検討した。さらに、これらの細胞をヌードマウスに2 \times 10⁶個ずつ移植して腫瘍形成と転移性について検索した。

【結果と考察】

手術材料は病理組織学的には多形性腺腫で明らかな異型細胞も確認されない典型的な良性格が確認された。初代培養から4継代目に増殖能が高い細胞集団が出現し、そのなかに大型異型細胞がみられた。それらを選択的に継代しつづけたところ、12・20代からクローン化に成功し、6細胞系を樹立した。それらは紡錘形から多角形の形態をしめし、ケラチン, S-100蛋白質免疫陽性をしめした。これら6細胞系には共通して、平均107本, 5n型の染色体で、第13番染色体の長腕13q12より端部則と第9番染色体の短腕9q13との相互転座ほかの異常にくわえ、p53遺伝子Exon 7の同一塩基欠失がみられた。ヌードマウス移植では、19週以内に最大長径約15mmの腫瘍を形成し、扁平上皮癌様をしめしたが、観察期間内にリンパ節・遠隔転移はなかった。以上の結果から、多形性腺腫にはトランスフォーム能を有する細胞がふくまれ、それらが腺腫内癌腫へ成長する可能性がしめされ、その癌化にはp53の変異をふくむ特異的染色体再構成にともなうキメラ遺伝子の関与が示唆された。

6. Mutational events in LMP1 gene in salivary gland lymphoepithelial carcinomas.

Division of Oral Pathology, Department of
Tissue Regeneration and Reconstruction,
Niigata University Graduate School of Dental and Medical Sciences.
Jen Kai Yu, Cheng Jun, and Saku Takashi

It is still unknown what kinds of roles Epstein-Barr virus (EBV) infection highly specific to salivary gland lymphoepithelial carcinomas (LECs) play in their tumorigenesis. To clarify the significance of EBV in LECs, we paid particular attention to the LMP-1 gene, which is responsible for triggering the NFκB pathway. Sixty-two cases of EBV positive LECs confirmed by PCR and *in-situ* hybridization were collected from various areas of the world and studied immunohistochemically for LMP1. Furthermore, PCR for the LMP-1 carboxy (C) terminus region was performed, and the PCR products were sequenced for detection of other mutational events. LMP-1 gene products were immunohistochemically demonstrated in 50% of the cases, while PCR amplification of the LMP-1 gene was successful in 41 cases (66%). Among them, a 30-bp deletion in the C-terminus of the LMP-1 gene, which had been shown to be characteristic to EBV in Chinese nasopharyngeal carcinomas, was found in 20 cases (32%). Most of them were from Guangzhou, Chengdu and Taiwan, while most of the cases from Shanghai and other areas showed no 30-bp deletion. In addition, several point mutations including codon 338 of LMP-1 were commonly shared by the cases with or without the 30-bp deletion. These results indicate that there are two major genomic variations of EBV harboring in salivary gland LECs. The frequent mutational events in the carboxyl-terminus in addition to the 30-bp deletion also seem to be critical for the pathogenesis because such mutational events may promote cellular proliferation by suppressing NFκB pathways which could be activated by the C-terminal region.

7. 口腔扁平上皮癌のリンパ節転移予測因子としての MMP-1 遺伝子発現定量

新潟大学大学院医歯学総合研究科¹顎顔面口腔外科学分野,
³組織再建口腔外科学分野,⁴口腔病理学分野
²長岡赤十字病院歯科口腔外科
永田昌毅¹, 星名秀行¹, 藤田 一¹, 関 雪絵¹,
長島克弘¹, 小玉直樹¹, 大西 真², 新垣 晋³,
斎藤 力³, 依田浩子⁴, 朔 敬⁴, 高木律男¹

【背景と目的】

悪性腫瘍の個性診断は最適な治療法選定を可能にし、治療成績向上、QOL改善、医療費の適正化など将来的に望まれる個人化医療実現の基本である。これまでに私達は口腔扁平上皮癌 (OSCC) の個性診断に有用な分子選定を目的にcDNAマイクロアレイによる遺伝子発現解析を行い、いくつかの分子に転移予測因子としての可能性を見出した。今回はこれまでの研究結果から、頸部リンパ節転移と強い関連が示唆されたMMP-1について、リアルタイムPCR法による発現定量を行い、転移予測因子としての有用性を検討した。

【対象と方法】

新潟大学歯学部附属病院口腔外科ならびに長岡赤十字病院歯科口腔外科において治療をおこなったOSCCについて、生検あるいは手術時に切除したOSCC組織からRNAを抽出した。cDNAを合成し、リアルタイムPCR法によるMMP-1の相対的遺伝子発現定量を行った。MMP-1 / β -actinと頸部リンパ節転移 (LN転移) の関連を検討した。

【結果と考察】

MMP-1 遺伝子発現レベルは舌-口底-頬粘膜癌T1-T2症例のうち、LN転移巣を有する原発癌組織において有意に高かった。MMP-1の早期癌におけるLN転移予測マーカーとしての有用性が示唆された。一方で、上顎-下顎歯肉癌T1-T2症例では、MMP-1発現量がLN転移と必ずしも対応せず、他因子の関与について検討が必要と考えられた。T3-T4の進行癌症例ではMMP-1発現量とLN転移に関連は示されなかったが、後発転移、リンパ節多発転移、局所再発、死亡症例でのMMP-1高発現が観察され、進行癌において予後判定因子としての可能性が示唆された。MMP-1発現レベルは現行の画像診断や組織学的診断に併用することによる多角的判定によって、簡便なOSCCの診断精度向上が実際に期待できると考えられる。

8. 県内歯科医院・病院歯科を対象とした感染対策に関するアンケート調査

新潟大学大学院医歯学総合研究科¹顎顔面口腔外科学分野,
²臨床感染制御学分野²新潟大学医学部附属病院 感染管理部
 高木律男¹, 岡本幸子², 塚田弘樹^{2,3}, 下条文武³

HIV感染者が日本のどの地域でも適切な医療を受けられることを目的に、平成5年に各都道府県にエイズ治療の「拠点病院」が設置された。平成9年には、全国を8ブロックにわけ、それぞれのブロックの核となる「ブロック拠点病院」が選定され、医学部附属病院は、県立新発田病院、新潟市民病院とともに、関東・甲信越地区のエイズ治療ブロック拠点病院となった。現在感染管理部を中心に各科の医師による集学的な管理が行われている。

HIV感染者は新潟地区でもわずかではあるが増加傾向にあり、薬剤および治療技術が進歩するにしたいが、歯科での治療が必要となる場合も増加することが予測され、県内各地で歯科治療を含めた口腔管理が受けられるような体制作りが必要になる。そこで、医学部附属病院感染管理部と協力して、県内の歯科医院・病院歯科を対象に平成14年9月～10月にかけて、感染対策に関するアンケート調査を行ったので、その概要を報告する。

アンケート用紙の配布先は1145件で、有効回答数は496件、回収率43.5%（廃業者を除く）であった。アンケートの項目は、大別して感染対策の現状と感染症別の診療状況、感染対策上の問題点とした。

9. 下顎骨放射線骨壊死の危険因子 歯科管理の必要性

新潟大学大学院医歯学総合研究科
 顎顔面再建学講座顎顔面放射線学分野
 勝良剛詞, 益子典子, 林 孝文

【目的】

下顎骨の放射線骨壊死と放射線治療および歯周組織の状態との関係を調査すること。

【対象と方法】

頭頸部癌で放射線治療を受けた23人の有歯顎者。骨壊死患者と健常者のパノラマエックス線画像による歯周組織の状態と臨床所見を比較した。歯周組織の状態は歯槽骨の吸収の程度により3分類した。

【結果および考察】

23患者中9人が放射線骨壊死を起こした。幾つかの因子（線量、歯の状態）において放射線骨壊死が統計学的に有意に多かった。歯槽骨の吸収の程度が顕著なほど経時的に放射線骨壊死との関連が強くなった。一般的な放射線治療を行われた頭頸部癌患者の放射線骨壊死におい

て歯周組織の状態が最も重要な危険因子であることが示された。今回の結果から頭頸部癌放射線治療患者に対して歯科医師と歯科衛生士による口腔衛生ケアを含めた歯科管理が最も重要であることが示唆された。

10. 最近2年間における新潟大学歯学部附属病院 いびき外来受診患者の臨床的検討

新潟大学大学院医歯学総合研究科
¹顎顔面再建学講座組織再建口腔外科学分野,
²口腔健康科学講座顎顔面口腔外科学分野,
³摂食環境制御学講座咬合制御学分野,
⁴顎顔面再建学講座摂食機能再建学分野
 高田佳之¹, 小林正治¹, 泉 直也¹, 石黒慶史¹,
 新垣 晋¹, 高木律男², 飯田明彦², 斉藤 功³,
 小林 博⁴, 齊藤 力¹

近年、いびき症ないし睡眠呼吸障害は生活習慣病のひとつとして広く認知されるようになってきた。新潟大学歯学部附属病院では1998年5月よりいびき症および睡眠呼吸障害に対する専門外来である「いびき外来」を開設して、その治療を行ってきた。本疾患の病態はいまだ十分には解明されていないことから、治療法やその選択について毎週、症例検討会を開いてきた。また病態の多様性から本外来のみの治療では対応できない症例があるため、呼吸器内科、耳鼻咽喉科、神経内科などと連携する症例も多数存在した。

そこで最近2年間における本外来受診患者の臨床的検討を行ったのでその概要を報告するとともに、これまでの臨床経験ならびに症例検討から、その治療方法について若干の知見が得られているので、合わせて報告する。平成13年、14年に本外来を受診した患者は170名で男性118名（69.4%）、女性52名（30.6%）であった。年齢は20歳未満の患者は9名（5.3%）、20～39歳は49名（28.8%）、40～59歳は82名（48.2%）と最も多く、60歳以上は30名（17.9%）で、平均年齢は45.1歳であった。紹介患者は54名（31.8%）で、そのうち学外からの患者は38名（22.4%）であった。

すべての患者に対して問診、セファロ分析、およびパルスオキシメトリーによる在宅検査を行い、その結果をもとに本外来の症例検討会において治療方針を決定した。要治療患者に対しては終夜睡眠ポリグラフを行ったうえ、保存的療法ではPMA（口腔内装具）の装着を、外科的療法としてはRF、LAUP（軟口蓋形成術）を施行した。

11. 長野赤十字病院口腔外科における最近2年間の手術症例の臨床統計的検討

長野赤十字病院口腔外科
山口裕理, 横林敏夫, 清水 武, 五島秀樹,
鈴木理絵, 近添真也, 桜井健人

長野赤十字病院口腔外科において2001年1月から2002年12月までの2年間に中央手術室にて行われた手術症例408例, および口腔外科外来, 病棟処置室において行われた小手術症例4444例の臨床統計について報告する。

中央手術室での手術症例は全身麻酔が263例64%, 局所麻酔が145例36%であった。性別では男性207例, 女性201例でほぼ同数であった。年齢では最少1歳, 最高93歳で, 50歳代がもっとも多く68例17%, 次いで20歳代66例16%, 60歳代64例16%であった。手術方法別では, 全身麻酔例において嚢胞手術64例24%, 悪性腫瘍手術43例16%, 抜歯術37例14%, 顎変形症手術36例14%の順であった。局所麻酔例においては, 嚢胞手術63例43%, インプラント手術32例22%, 悪性腫瘍手術17例12%の順であった。

外来および病棟処置室での観血処置例は4444例で, 抜歯術が3361例うち埋伏智歯が1751例, 萌出智歯が387例であった。その他の主な観血処置例は, 膿瘍切開177例, 歯根端切除術128例, 粘液嚢胞摘出術104例などであった。

12. 2次治療として種々の手術とインプラント治療を行った口唇口蓋裂の1例

¹新潟労災病院歯科口腔外科
²寺田矯正歯科
武藤 祐一¹, 笠井 直栄¹, 松井 宏¹,
寺田 康子², 吉沢真由美²

今回, 私たちは, 高度な顎変形を有する, 口唇口蓋裂の1例を経験し, Surgically assisted rapid palatal expansion (SARPE) を含めた顎矯正手術からインプラント補綴に至る治療を行ったので, その概要を報告する。症例: 18歳, 男性。現病歴: 満期正常分娩。某大学口腔外科にて, 3か月時口唇形成術, 1歳時口蓋形成術を施行された。名古屋, 金沢の病院にて3歳時まで言語治療を施行し, 6歳時, 寺田矯正歯科受診。中学生時強い下顎の過成長を認め, 外科的矯正治療の適応と判断されたが, 患者の希望にて高校卒業を待ち, 1998年6月2日初診。初診時現症: 身長166cm, 体重56kg。顔貌は非対称で, 左側上唇に癒痕を認める。側貌では著しい下顎前突様顔貌を呈していた。上顎歯列は鞍状歯列弓で, 著しいcollapseを認め, 咬合はtotal cross biteだった。診断: 左側口唇口蓋裂。上顎劣成長, 下顎過成長による下顎前突症。

処置および経過: 98年8月26日Le Fort-I型骨切り術に準じ, SARPEを行った。00年8月10日上下顎骨切り術を施行し, 上顎を5mm前方移動, 下顎を8mm後方移動させた。01年3月1日顎裂部腸骨移植術施行。顎裂部にdental implant埋入を計画, 01年10月18日骨増量のため鼻腔側および頬側にchin bone graftを施行し, 02年3月1日 12 Fixtureを埋入した。埋入は歯槽骨増高を目的にGBRを併用した。同年11月8日 12 補綴物を装着, 治療を終了し, 良好な顔貌と安定した咬合が得られた。

13. 新潟労災病院歯科口腔外科における平成14年度麻酔症例の検討

新潟労災病院歯科口腔外科
松井 宏, 武藤祐一, 笠井直栄

【目的】

平成14年4月より当科では中央手術室における手術に対する麻酔管理は, 全て演者が担当している。そこで今回, 1年間の全身および局所麻酔症例について検討するとともに, 病院歯科口腔外科における歯科麻酔医の意義について若干の考察を加えて報告する。

【方法】

対象は平成14年度に行われた172件とし, 年齢・性別分布, 手術内容, 麻酔導入, 挿管, 維持法, 麻酔時間, 周術期合併症について調査し, さらに手術内容の変化について検討を加えた。

【結果】

172件中, 全身麻酔は125件, 局所麻酔は47件であった。全身麻酔症例は2~89歳にわたり, 11~20歳が41件(32.8%)で最多だった。手術内容は顎矯正手術が43件(34.4%), 埋伏歯抜歯が38件(30.4%)で多数を占めた。麻酔導入, 挿管, 維持法は, それぞれプロポフォルンによる急速導入, 経鼻挿管, 笑気・酸素・セボフルンによる維持が大多数であった。麻酔時間は約1時間~6時間半で, 平均2時間26分だった。術前合併症は高血圧症, 気管支喘息が多かったが, 周術期に重篤な合併症は生じなかった。局所麻酔症例では51~60歳が15件(31.9%)で, また手術内容はインプラントが21件(44.7%)で最多だった。鎮静法に使用した薬剤は, ドルミカムとプロポフォルンの併用が多かった。一方, 他年度と比較し小児, 障害者, 歯科治療恐怖症患者に対する全身麻酔下歯科治療が増加したことや, 緊急止血術が鎮静法下に行われたことが特徴的であった。

【考察】

口腔および口腔外科手術を熟知した歯科麻酔医が病院歯科口腔外科に所属して麻酔管理にあたることは安全管理上非常に意義がある。また, これまでは手術件数が多

くなると日程調整に苦勞する事が多かったが、昨年度はすみやかな対応が可能であり、診療時間の有効利用にもつながった。さらに対外的には、開業歯科で行動調整に難渋していた症例を、上越地区においても管理することが可能になり、病診連携も進められた。